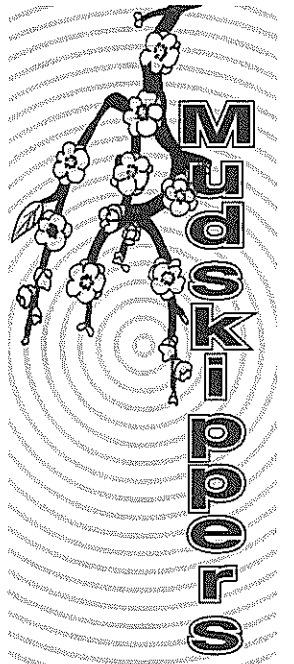


退職教授挨拶



第31号

2011年2月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/佛昭和堂

定年退職を迎えて



池田 豊子

十年ひと昔といいますが、私が本学に赴任したのは32年前、33才でした。この新聞の発刊当時から編集委員となり、30号で卒業することになり感慨もひとしおです。こんなに長く続くとは思っていませんでしたが、青春真只中の学生の皆さんと接することが日々楽しく、気がついてみると定年を迎える年齢になっていたというのが実感です。

ことしかできませんでしたが、煎じつめると医学も文学も悩める人間が対象という事です。とても当たり前のことですが、古来普遍的な問題であり、あらゆることの原点だと思えます。どの分野に願っています。

退職を迎えて



小泉 俊三

趣味は何ですか？

仕事？(笑)音楽鑑賞と美術鑑賞です。

学生に伝えたいことは？

良い医者になってください。

良い看護師になってください。良い医者と患者さんを第一に考え

は患者さんを第一に考え

ることが大事です。次に大事なのはコミュニケーション能力が高いということです。そしてコンピュータシー(実際の現場で問題を解決できる能力)があるということです。その2つの土台となるのは、プロフェッショナルな態度と人間関係です。自分も関係者、自分を磨くことによって輝かせてほしいというのが、学生のみならずに希望することです。私もそのようにしていきたいと思っています。

いきなり私を酒場に連れていき、好きな女性像などを訊かれた。それで面接がバズだそうで、私は新設の佐賀医大の助教授に内定したようだ。もつと真面目な理由は後から知ったのだが、次に会ったのが初代学長の古川哲二先生である。この時も面接らしきことはせず、佐賀医大が開講するまで、九大医学部生化学教室の高木康敬教授の下で助手になる事がスラスタと決まった。だから、退職の挨拶にいった会社の上司も卒業した東大の恩師たちも驚いた。上司は私を工場に飛ばそうと思っていたようだ。自分の人生が慌ただしく流転していった事は、今もよく覚えてる。

数年間、飲酒運転の車に衝突されて、海に転落した3人の幼児が死亡するという痛ましい事故が起きたことは記憶に新しい。酒を飲んで運転するなんてもつてのほか、モラルはいつたどこにいったのだと声高に叫ばれた。罰則が強化されたが、飲酒運転撲滅への道のりはまだまだ遠い。

佐賀大学医学部学生新聞 Mudskippers の編集員として、長いあいだ活躍されてきた社会医学講座の池田豊子教授が、この3月で定年退職される。ほかに、医学部の生き字引でもあった分子生命科学講座の高崎洋三教授、多くの患者さんのために貢献された内科学講座の長澤浩平教授、ひよんなところから拙子が手に入れた煎餅に、その笑顔が大きく描かれていた総合診療部の小泉俊三教授も定年退職される。長いあいだお疲れさまでした。そして、ありがとうございました。

行ってしまった人、逝ってしまった人、そして去っていく私



高崎 洋三

戸田教授から定年退職にあたって何か書けと言われて、いろいろ考えたのだが、結局過去を振り返って書くことにした。

戸田教授から定年退職にあたって何か書けと言われて、いろいろ考えたのだが、結局過去を振り返って書くことにした。やはり30年以上、我が人の半分を過ごした佐賀

九大の高木先生は、神様のような人であった。私のため佐賀医大のために良かれと思ったことは、一人であらう。私にすぐに行動に移された。感謝している。また忘年会のあとにディスコに行った時に、緑色のブレザーを着て踊っている白髪の先生の姿に若いお嬢さん達は憧れたものだ。去年亡くなられたのは、まことに残念である。

九大を経て佐賀に赴任した私の最初の仕事は、池聖淳副学長である。古



河野 史

(一面からの続き)

川先生の回復祝いに私も小池家に呼ばれた。小池先生は古川先生に向かつて「大した病気ででもないのに、休んだりして。俺のほうが目いんだよ」と言っていて騒いでいたが、その後急死された。その前後だったのだろうか、私と乗安先生は小池家に押しかけて飲みましよう誘ったが、夜も遅いこと云って断られてしまった。我々はぶつぶつ文句を言いながら引き上げたのだが、その後大往生された訳だ。初代病院長の木村登先生も亡くなられたから、佐賀医大の初代の幹部は皆鬼籍に入られた。豪快な小池先生にはよく「高崎、お前やるな、やるんだな」と酔って絡まれた。しつこいなあと思ったが、彼の期待に応えるほどの活躍をしなかったのが、悔やまれる。他に在職中に亡くなられた島本、伊藤、平井、中島の各先生とも親しくさせてもらった。いずれも惜しい人材であった。私も元気で定年を迎えられて幸せ者である。

古賀昭典先生は、初代の法学担当の教授である。法学の概念も理解していない現在の医学生は可哀想である。彼等は、労働

法や公的扶助といった知識を身につけておくべきだ。古賀先生は佐賀医大在籍教授(幹部は除く)で唯一叙勲されたのだから、彼に授業を受けた者は幸せである。古賀先生は今もって酒飲み友達であり、私の事を大いに心配してもらっている。金関毅先生は元副学長であつたが、実に信頼できる人である。彼が提案したり説得に來られたりすると、従わざるを得ない魅力に溢れた人である。手紙を差し上げると、常に花の写真の入った返事を下さる。胸がじんと来る、ニクイ人なのである。今もって、誠意をもって付き合つて下さる。

研究室でお世話になつたのが、堀勝治先生である。この人がいなかったら、研究者としての自分は存在しなかつたと云つてもいい。佐賀医大赴任後の私に手を差し伸べてくれた島本、伊藤、平井、中島の各先生とも親しくさせてもらった。いずれも惜しい人材であった。私も元気で定年を迎えられて幸せ者である。

古賀昭典先生は、初代の法学担当の教授である。法学の概念も理解していない現在の医学生は可哀想である。彼等は、労働

何も知らせず勝手に私を宿泊させたのだから。もう一人のドイツ人の友人 Alfred Pingoud 氏とは専門の研究分野が同じである。私はドイツ・ギーゼンにある彼の研究室を二度訪ねてきた。彼も佐賀医大にやつて来て、慌しく滞在した。一緒に日本生化学会大会に出席した時は、彼が英語でほとんど質問して周囲を慌てさせたものだ。一緒に晩秋の伊豆の海を泳いだことも思い出す。奥さんツ自由大学の Claus Schnarreiberger 氏である。彼は皆から「グラちゃん」と云われて愛されてきた。彼の帰国後、私はベルリンの彼の研究室を訪問したことがある。地図だけを頼りに彼のオフィスに辿りついた。「Claus」と呼びかけると、彼は向こうを向いたまま「フン」と答える。後、私は「I am Yozo」と言うと、暫く黙つていて振り返り、「Yozo-san、どうしてここに居るんだ」と大騒ぎした、その時が懐かしい。その前に訪問した時は、彼の家に泊りした。奥さんにも大変世話になったが、彼等が離婚した原因の一つが私の滞在だったと思う。何故ならクラちゃんは、奥さんに

礼を言いたい。八木さんは技官であつたが、東大に論文を提出し、見事理学博士号をかちとつた。私が彼女から教わつた事は実に多く、今も頼りになる存在である。久木田准教授とも古くからの付き合いだが、福岡から通勤しコソツと業績を伸ばしてこられた。私とはいつも頼り頼られ、楽しい付き合いをさせてもらつた。

もう一人、Mさんを挙げたい。Mさんは佐賀医大一期生であり、私が最初に担当したチュートリアルの学生であつた。Mさんの「破滅的な」行動は、未熟な教師である私に動揺を与えた。Mさんの、私には理解できない言動が続いた。だが頭脳は抜群に良く、カンも良かった。チューターの指導を行なつた。実に苦労させられたこともあつた。私は一度、この江西医学院に招待され訪問したのである。Mさんが今何処で何をしているか知らない。俗にいう名医の道を歩んでいないかも知れないが、案外天国の古川先生を喜ばせているよ

うな気がする。女性が登場しないって？ 女性陣はどなたも現役である。ただ、八木ひとみ、久木田明子のお二人には敬意をもってお話を調節している一酸化窒素(NO)という物質がある。私はこれを初めて聞いた時に、何故気体が組織に存在するのか?と疑問に思つた。調べてみるとNOは100gの水に0.0432g溶解するのであり、酸素やCOより溶ける事を知つた。おや?と疑問に思う態度が大事だ。また周りの人も、その疑問に思う態度をスポイルして欲しくないのである。

最後に、多くの中国留学生との交流を紹介したい。江西医学院(当時)と佐賀医大との交流協定が結ばれ、私も張楠さんを始めとする留学生の指導を行なつた。実に苦労させられたこともあつた。私は一度、この江西医学院に招待され訪問したのである。Mさんが今何処で何をしているか知らない。俗にいう名医の道を歩んでいないかも知れないが、案外天国の古川先生を喜ばせているよ

退職を迎えて



膠原病
リウマチ内科
長澤 浩平

学生へ一言

縷もあつて、私費留學生の住居の世話をするNP O法人「国際下宿屋」の理事として8年ほど働いてきた。この活動が成果を上げてきたのは、ひとえに佐賀の市民の献身的な働きにある。佐賀大学および医学部が、この法人の活動にもっと理解してくれるよう切望している。好きなこと楽しいことを見つけて楽しもう!

では皆さん、お世話になりました、さようなら。病リウマチ内科への入局者が少なく、研究、教育、診療のすべてにおいて、若い医局員に負担をかけたことと。従つて研究の拡がりや進展は必ずしも満足いくものではない。大学に残り、そのエネルギーで母校を盛り上げてもらいたいです。

私自身はまだもう少しやる気が残っています。で、佐賀を離れますが、小さな病院にリウマチセンターを開設して微力ながら頑張ってみようと思つています。また、歴史が好きなので、暇を見つけて城や由緒ある旧跡などを訪ね歩いてみたいと楽しみにしています。

私が九大から当時の佐賀医大に教授として赴任したのは、1994年の12月でしたから16年を超えました。当時はまだ50歳前で、定年のことなど考えもしなかつたのです。が、ここに至ると、気分はまだ若いのですが、やはり年のことを感じざるを得ません。最初、佐賀医大に來たときの感想は、建物の内外が清潔できれいなということ、人が少ないということでした。学生についていえば、素直な学生が多く、教育する方としてはやりやす

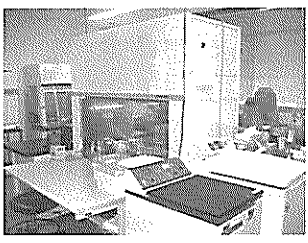
学生へ一言

たのは、専門とする膠原病リウマチ内科への入局者が少なく、研究、教育、診療のすべてにおいて、若い医局員に負担をかけたことと。従つて研究の拡がりや進展は必ずしも満足いくものではない。大学に残り、そのエネルギーで母校を盛り上げてもらいたいです。

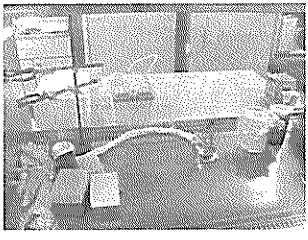
私自身はまだもう少しやる気が残っています。で、佐賀を離れますが、小さな病院にリウマチセンターを開設して微力ながら頑張ってみようと思つています。また、歴史が好きなので、暇を見つけて城や由緒ある旧跡などを訪ね歩いてみたいと楽しみにしています。

16年間本当にお世話になりました。佐賀大学医学部の発展をお祈りします。

何事も積極的に! 勉強以外のことにも目を向けよう!



実験室の様子



無菌状態で作業を行うためのクリーンベンチ内

私は去年の夏休み期間の2週間を使い、久木田明子先生の研究室で、選択コースの一つである「骨代謝・免疫研究法」の実験をさせていただきました。久木田先生、大学院生の方々に丁寧にご指導いただき、とても充実した実験内容でしたので、今回ご紹介いたします。

実験の内容は大きく分けて2つありました。2週目は、骨芽細胞を培養し毎日どれくらい細胞が増殖しているかを測定することにより、増殖曲線を作成しました。

2つ目は、自分でネズミの大腸骨から採取した骨髄内の細胞を培養し、その中に含まれる造血幹細胞から、破骨細胞を分化させるというものです。破骨細胞の分化に必要なサイトカイン(破骨細胞分化因子 RANKL、ビタミンD3や M-CSF など)を様々な組み合わせで添加し培養します。1週間、細胞の分化を待ち、最後に出来上がった破骨細胞を写真撮影します。自分で採取してきた未熟な細胞が、1週間うちに融合し多核

の破骨細胞に分化しているのを目にしたときは、種から育てて芽が出た植物を見るようでとても感動しました。添加したサイトカインやホルモンの種類によって破骨細胞の働き方が異なり、造血細胞以外の細胞との相互作用も必要であることがわかりました。その違いが生じる原因を調べていくうちに、骨代謝と免疫系の関係を学ぶことができました。

実験の空き時間には自主学習の時間が与えられ、疑問点は先生が推薦してくださる資料や、先生からのお話から考察のヒントをいただきました。実習

最後に、徳永教授始め、診断病理学の先生の魅力、重要性を学ぶことができたため、毎回の病理実習がとても楽しくなりました。

(医4 中山 隆雄)

担当教授(徳永教授)より「血管系からみた疾病の臨床病理学的研究」では、手術例や病理解剖例の中で血管に起因した疾患の病態生理を理解できるようにスタッフが直接指導します。病理は馴染みにくいと思っている学生さんでも、和気あいあいとした研究室に気軽に出入りして、日常の病理診断業務やテレパソロジー(遠隔病理診断)などの臨床に直結した現場をみると、病理のおもしろさが分かります。気安く研究室を訪ねてみて下さい。

白衣姿の合唱部員が今年もキャンドルを持って歌いながら病棟を歩いて回りました。賛美歌の内容は「天なる神にはみさかえあれ」「神の御子は今宵しも」「もろびとこぞりて」「牧羊羊を」「荒野のはてに」「きよしこの夜」。学生たちは歩きながらの合唱だったので息も絶え絶え。しかし、病棟にきれいに響き渡る歌声を聴いた患者さんは皆さんとても満足げな表情で聴き

新聞編集委員
戸田修二教授(編集長)
池田豊子教授、河野史教授
尾崎岩太准教授、藤井可講師
川良智美(医6)、徳田悠希子(医5)、野上愛、吉田紀子(医4)、森下さくら、草場香那(医3)、壹岐聡一朗、合田夏希、鈴木源晟、橋本健太(医2) 尼寺那佳子、沖藤悠貴、中道あずさ、藤井玲衣奈(看2)、竹藤徳子(看1)
要望などの連絡先
学生サービス課総務担当 島田
eshimada@cc.saga-u.ac.jp



私は去年の夏休み期間の2週間を使い、久木田明子先生の研究室で、選択コースの一つである「骨代謝・免疫研究法」の実験をさせていただきました。久木田先生、大学院生の方々に丁寧にご指導いただき、とても充実した実験内容でしたので、今回ご紹介いたします。

実験の内容は大きく分けて2つありました。2週目は、骨芽細胞を培養し毎日どれくらい細胞が増殖しているかを測定することにより、増殖曲線を作成しました。

2つ目は、自分でネズミの大腸骨から採取した骨髄内の細胞を培養し、その中に含まれる造血幹細胞から、破骨細胞を分化させるというものです。破骨細胞の分化に必要なサイトカイン(破骨細胞分化因子 RANKL、ビタミンD3や M-CSF など)を様々な組み合わせで添加し培養します。1週間、細胞の分化を待ち、最後に出来上がった破骨細胞を写真撮影します。自分で採取してきた未熟な細胞が、1週間うちに融合し多核

の破骨細胞に分化しているのを目にしたときは、種から育てて芽が出た植物を見るようでとても感動しました。添加したサイトカインやホルモンの種類によって破骨細胞の働き方が異なり、造血細胞以外の細胞との相互作用も必要であることがわかりました。その違いが生じる原因を調べていくうちに、骨代謝と免疫系の関係を学ぶことができました。

実験の空き時間には自主学習の時間が与えられ、疑問点は先生が推薦してくださる資料や、先生からのお話から考察のヒントをいただきました。実習

最後に、徳永教授始め、診断病理学の先生の魅力、重要性を学ぶことができたため、毎回の病理実習がとても楽しくなりました。

(医4 中山 隆雄)

担当教授(徳永教授)より「血管系からみた疾病の臨床病理学的研究」では、手術例や病理解剖例の中で血管に起因した疾患の病態生理を理解できるようにスタッフが直接指導します。病理は馴染みにくいと思っている学生さんでも、和気あいあいとした研究室に気軽に出入りして、日常の病理診断業務やテレパソロジー(遠隔病理診断)などの臨床に直結した現場をみると、病理のおもしろさが分かります。気安く研究室を訪ねてみて下さい。

白衣姿の合唱部員が今年もキャンドルを持って歌いながら病棟を歩いて回りました。賛美歌の内容は「天なる神にはみさかえあれ」「神の御子は今宵しも」「もろびとこぞりて」「牧羊羊を」「荒野のはてに」「きよしこの夜」。学生たちは歩きながらの合唱だったので息も絶え絶え。しかし、病棟にきれいに響き渡る歌声を聴いた患者さんは皆さんとても満足げな表情で聴き

新聞編集委員
戸田修二教授(編集長)
池田豊子教授、河野史教授
尾崎岩太准教授、藤井可講師
川良智美(医6)、徳田悠希子(医5)、野上愛、吉田紀子(医4)、森下さくら、草場香那(医3)、壹岐聡一朗、合田夏希、鈴木源晟、橋本健太(医2) 尼寺那佳子、沖藤悠貴、中道あずさ、藤井玲衣奈(看2)、竹藤徳子(看1)
要望などの連絡先
学生サービス課総務担当 島田
eshimada@cc.saga-u.ac.jp

存在だったと思います。今号は、その池田先生をはじめ、小泉先生、高目先生、長澤先生という4人の名物教授の退職記念号でもあります。各先生は、佐賀医大の創立初期から多くの学生を暖かい眼差しで見守ってこられました。まさに「佐賀大医学部の母」のような存在で、紙面で伝えられる学生さんたちの活躍も相変わらずです。依然冬の戻りも厳しい時節ですが、草木生い茂る弥生を目指して、受験生の皆さんはベストを尽くして下さい。

今号も無事に発行できたことに感謝致します。

(藤井可)

編集後記
Mudskippers第1号から編集委員を務めてこられた池田豊子教授が、今春退職されます。池田先生は、佐賀医大の創立初期から多くの学生を暖かい眼差しで見守ってこられました。まさに「佐賀大医学部の母」のような存在で、紙面で伝えられる学生さんたちの活躍も相変わらずです。依然冬の戻りも厳しい時節ですが、草木生い茂る弥生を目指して、受験生の皆さんはベストを尽くして下さい。

今号も無事に発行できたことに感謝致します。

(藤井可)

存在だったと思います。今号は、その池田先生をはじめ、小泉先生、高目先生、長澤先生という4人の名物教授の退職記念号でもあります。各先生は、佐賀医大の創立初期から多くの学生を暖かい眼差しで見守ってこられました。まさに「佐賀大医学部の母」のような存在で、紙面で伝えられる学生さんたちの活躍も相変わらずです。依然冬の戻りも厳しい時節ですが、草木生い茂る弥生を目指して、受験生の皆さんはベストを尽くして下さい。

今号も無事に発行できたことに感謝致します。

(藤井可)

存在だったと思います。今号は、その池田先生をはじめ、小泉先生、高目先生、長澤先生という4人の名物教授の退職記念号でもあります。各先生は、佐賀医大の創立初期から多くの学生を暖かい眼差しで見守ってこられました。まさに「佐賀大医学部の母」のような存在で、紙面で伝えられる学生さんたちの活躍も相変わらずです。依然冬の戻りも厳しい時節ですが、草木生い茂る弥生を目指して、受験生の皆さんはベストを尽くして下さい。

今号も無事に発行できたことに感謝致します。

(藤井可)

存在だったと思います。今号は、その池田先生をはじめ、小泉先生、高目先生、長澤先生という4人の名物教授の退職記念号でもあります。各先生は、佐賀医大の創立初期から多くの学生を暖かい眼差しで見守ってこられました。まさに「佐賀大医学部の母」のような存在で、紙面で伝えられる学生さんたちの活躍も相変わらずです。依然冬の戻りも厳しい時節ですが、草木生い茂る弥生を目指して、受験生の皆さんはベストを尽くして下さい。

今号も無事に発行できたことに感謝致します。

(藤井可)

選択実習



私が診断病理学講座(徳永教授)の実習「血管系から見た疾病の臨床病理学的研究」を選択したのは、二つの理由があります。一つは大学で行われている基礎研究を経験してみたかったこと、そしてもう一つは自分の興味のある循環器科の疾患を、病理学的な視点から勉強してみたかったためです。

実習の内容と履修期間については教授と相談した結果、3年生の夏休みの3週間を利用して、血管が関与している疾患の病態生理を勉強することにしました。

実習の流れは、病理標本をスゲツチし、その病気のメカニズム等もあわせてレポートを作成し、夕方に先生方の前で発表する、というものでした。まだ臨床系の授業が始まる前でしたので、様々な疾病を病理学的視点から考える習慣が身に

最後に、徳永教授始め、診断病理学の先生の魅力、重要性を学ぶことができたため、毎回の病理実習がとても楽しくなりました。

(医4 中山 隆雄)

担当教授(徳永教授)より「血管系からみた疾病の臨床病理学的研究」では、手術例や病理解剖例の中で血管に起因した疾患の病態生理を理解できるようにスタッフが直接指導します。病理は馴染みにくいと思っている学生さんでも、和気あいあいとした研究室に気軽に出入りして、日常の病理診断業務やテレパソロジー(遠隔病理診断)などの臨床に直結した現場をみると、病理のおもしろさが分かります。気安く研究室を訪ねてみて下さい。

クリスマスイベント2010



入ってくださったため、部員もキャロリングの成功を喜んだとのこと。この日の病棟は幻想的な雰囲気に包まれていました。



クリスマスコンサート
12月17日(金) 病棟一階ロビーにて、病棟イベント企画サークルSMILEが主催するクリスマスコンサートが今年も行われました。合唱部による、いきものがかり『ありがとう』、木下牧子『夢見たものは』、ヘンデル『ハレルヤコーラス』の歌声に始まり、続いて室内楽部の『讃美歌』『りすべり』。最後に、集まった患者さんへ交えた全員で『サイレントナイト』を歌いました。学生ボランティアの協力もあり、たくさんのお患者さんとともに一足早いクリスマスを楽しむことができました。

(竹藤)

存在だったと思います。今号は、その池田先生をはじめ、小泉先生、高目先生、長澤先生という4人の名物教授の退職記念号でもあります。各先生は、佐賀医大の創立初期から多くの学生を暖かい眼差しで見守ってこられました。まさに「佐賀大医学部の母」のような存在で、紙面で伝えられる学生さんたちの活躍も相変わらずです。依然冬の戻りも厳しい時節ですが、草木生い茂る弥生を目指して、受験生の皆さんはベストを尽くして下さい。

今号も無事に発行できたことに感謝致します。

(藤井可)